

新たな馬の改良増殖目標の骨子案

1 改良増殖をめぐる情勢と課題

馬は、農用馬（重種馬）、競走用馬（軽種馬）及び乗用馬として、それぞれの用途に応じた利活用が図られているが、近年においては飼養頭数が減少傾向で推移している状況。こうした中で、国内での多様な育種資源確保のため、遺伝的多様性に配慮した種畜の選抜、改良が求められているところ。

農用馬については、飼養頭数が急減する中で、生産者の高齢化等もあって生産率が低下傾向で推移していることから、飼養管理技術の向上、人工授精の普及及び近親交配の回避・雑種強勢効果の発現のための優良純粋種の維持確保とその活用が必要。

競走用馬については、近年、国内産馬の国際的な活躍がみられるなど、能力向上が図られており、さらなる能力向上が望まれる。

乗用馬については、乗用人口が増加の中で、ホースセラピー・教育・観光目的等の多様な利活用が図られており、こうした多様化するニーズへの対応、需要に応じた生産及び客観的な能力評価手法の確立等が課題。

また、日本固有の遺伝資源である日本在来馬については、希少性に配慮した品種の保存及びその特性を活かした利活用の推進が課題。

2 改良目標

(1) 能力に関する改良目標

それぞれの用途に応じた遺伝的能力の改良を推進

① 農用馬（重種馬）

強健性の向上を図るとともに、環境適応性が高く、性格が温順で飼料利用性の高いものとする。繁殖雌馬にあっては、適切な飼養管理により、流産や分娩事故の低減等を図りつつ、繁殖開始年齢、受胎率、生産率、ほ育能力、連産性等の繁殖能力の向上を図るものとする。なお、繁殖を開始する際は、単房等による適切な飼養管理や発育状況に配慮するとともに、分娩後の適切な栄養管理に努める。

また、ばん用にあっては、運動性に富み、けん引能力の高いものとし、肥育用にあっては、早熟で発育が良く、産肉能力の高いものとする。

繁殖能力に関する目標数値（全国平均）

	繁殖開始年齢 2才の割合	受胎率	生産率
現在 (平成25年度)	35%	75%	63%
目標 (平成37年度)	45%	75%	65%

注：繁殖開始年齢については、ばんえい競馬引退馬を除く。

② 競走用馬（軽種馬）

国際的に通用する、肉体的かつ精神的に強靱で、スピードと持久力に優れた競走能力の高いものとする。

③ 乗用馬

強健性の向上を図るとともに、性格が温順で動きの軽快な乗りやすいものとする。特に競技用馬にあつては、運動性に富み、飛越力、持久力等に優れたものとする。

(2) 体型に関する改良目標

肢蹄が強く、体各部の均称の良いものとし、それぞれの用途や品種の特性に応じた体型とする。

(3) その他家畜能力向上に資する取組

① 改良手法

ア 農用馬（重種馬）

ブルトン種、ペルシュロン種等優良純粋種の維持確保とその適切な利用に努める。

また、純粋種を含む優良種雄馬の広域利用による改良の推進及び人工授精技術（凍結精液の活用を含む）の改善とその普及に努めるものとする。

けん引能力等の評価方法の確立に向けた取組を推進するとともに、これら能力改良のための活用方策を検討。

イ 競走用馬（軽種馬）

血統の多様性に配慮しつつ優良な国内外の種雄馬及び繁殖雌馬

の確保と適切な利用に努めるとともに、強健性・運動能力等のデータ収集等を行い、その活用に努める。

ウ 乗用馬

多様なニーズに対応した馬の生産のために、優良な種雄馬及び繁殖雌馬の確保に努めるとともに、飛越能力等の評価方法の確立に向けた取組を推進するとともに、これら能力改良のための活用方策を検討。

また、優良種雄馬の広域利用による改良の推進及び人工授精技術（凍結精液の活用を含む。）の改善・普及に努めるものとする。

日本在来馬については、希少性に配慮した品種の保存及びその特長を活かした利活用を推進。

② 飼養管理

飼養管理の改善、特に馴致及び育成技術等の向上に努めるとともに、繁殖技術の改善・普及に努めるものとする。

また、良質な飼料や水の給与等による快適性に配慮した飼養管理（アニマルウェルフェア）の周知とその普及を推進。

③ 多様な利活用に関する情報共有

馬の多様な利活用に関する情報の収集・共有に努めるとともに、利用目的毎の需要に即した優良な国内産馬の安定的な生産と供給を推進。

3 増殖目標

飼養頭数については、利用目的毎の需要動向に応じた頭数となるよう努めるものとする。

また、日本古来の祭事等馬文化の継承に加え、安らぎや癒やし効果に着目したホースセラピーや乗馬、教育・観光目的等の多様な活用も重要。

(参考) 馬をめぐる情勢

1 馬をめぐる情勢

我が国における馬の飼養頭数は戦後減少し続けており、用途ごとの飼養頭数においては、農用馬及び競走用馬が減少傾向である一方、乗用馬については近年漸増している。現在の飼養頭数は、農用馬〇頭、競走用馬〇頭、乗用馬〇頭、日本在来馬〇頭程度である。(データ収集中)

2 これまでの改良の取組と成果

(1) 改良事業の概要

馬は、古くは農耕、運搬等生活に密着した役畜として、また軍用馬として改良が図られてきたが、戦後、農業機械化の進展により、役畜としての使途は薄れた。現在では、それぞれの利用目的に応じた改良が行われている。

農用馬は、種雄馬を中心にばんえい競馬の成績による選抜及びブルトン種、ペルシュロン種等のかけ合わせによる雑種強勢を利用して、けん引能力向上を期待した大型で早熟、強健性を目指した改良が進められている。

競走用馬は、海外からの優良種雄馬の導入及び国内の好成績馬を用いた次世代生産が行われ、競馬の国際化、種雄馬の輸入等により競走用能力の向上を目指した改良が行われている。

乗用馬は、乗用人口の増加の中で、国内外の優良種雄馬を活用した内国産乗用馬の生産・改良が行われており、特に競技馬の飛越力、持久力の向上が図られている。

(2) 成果

農用馬はけん引能力、産肉能力の向上を目指し、体長や体幅の増加による大型化が図られてきた。繁殖開始年齢はかつて4～5才であったものが2～3才が主流となるなど早熟化がみられている。

競走用馬は、平成25年には「ロンジン・ワールド・ベスト・レースホース・ランキング」における「レーティング115ポンド(国際G1レース出場レベル)」以上の馬306頭のうち、内国産馬が30頭を占めるなど、海外産馬の能力に比肩している。

乗用馬では、近年、内国産馬が国際馬術競技会で優勝し、内国産馬として初の快挙をあげている。